



コーネル雑記

土屋健治*

1982年の9月上旬にコーネルへきてから、2カ月近く経った。私は、コーネル大学 Southeast Asia Program の visiting fellow の資格で、Modern Indonesia Project のある West Avenue 102 番地の木造3階建ての古ぼけた建物の3階の一室にオフィスを与えられ、ここから徒歩15分のところにあるアパートから毎日落葉の絨毯を踏みしめて通う生活が続いている。大学は丘の上にあり、街に出るためには「ひよどり越え」のような坂道を下らなければならない。このため、大学周辺の街区は夜の12時になっても、ビールを飲んで談笑したり、コーヒーを傍らにしてノートを整理する学生で賑わっている。

ここへきて以来、アパートと研究室の往復がもっぱらで、「現地通信」になるような情報をえる機会にはさして恵まれないが、身の研究状況を記すことで「通信」に代えさせていただく。題して「コーネル雑記」としたゆえんである。

まず、Southeast Asia Program について。これは、その名の通りプログラムであり、独立の研究機関として存在しているわけではないが、各学部の研究者、学生のうち、とくに東南アジア研究に深い関心を寄せる人たちの、研究センター、情報蒐集・公開・公刊センター、および教育センターとして機能していることは周知の通りである。その概略を記せば次の通りである(1981-82年)。

まず、このプログラムに参加している研究者を discipline 別に示すと、Agricultural Economics (Randolph Barker), Anthropology (James A. Boon, A. Thomas Kirsch, Lauriston Sharp, James T. Siegel), Economics (Frank H. Golay), Government (Benedict Anderson, George McT. Kahin), History (O. W. Wolters, David K. Wyatt), History of Art (Alexanders B. Griswold, Stanley J. O'Connor), Linguistics (Franklin E. Huffman, Robert B. Jones,

John U. Wolff), Linguistics and Literature (John M. Echols), Music (Martin F. Hatch), Rural Sociology (Milton L. Barnett, E. Walter Coward, Jr., Robert A. Polson)。このうち、現在 O'Connor が director であり、Uris Hall という建物の1階におかれているこのプログラムのオフィスには、administrative supervisor をつとめる Helen Swank 女史ほか7名のオフィス・スタッフがつめている。なお、上記のうち、Echols 教授は本年6月に逝去したが、彼の名はあとに述べる Echols Collection としてとどめられることになった。なおまた、歴史学の Wolters 教授も今年限りで退官とのことである。

次に教育。東南アジア研究をめざす学生、院生はおおのの学部で discipline courses を修める一方、このプログラムが組織しているカリキュラムによって東南アジア研究をすすめることになる。これらのコースとして、Asian Studies (コース数6), Agricultural Economics (2), Anthropology (7), Government (6), History (7), History of Art (4), Music (4), Rural Sociology (4), Sociology (4) のほか、ビルマ語、カンボジア語、セブアノ語(ビサヤ語)、インドネシア語(一般およびインテンシブコース)、ジャワ語、タガログ語、タイ語、ヴェトナム語および言語学(とくに東南アジア比較言語論)の語学コースが設けられている。このうち、1982-83年度の講義題目を Anthropology と Government についてみると、次のようになっている。これらは、研究者の現在の関心のありようを、いく分なりとも示しているように思われる。

Anthropology: 1) *Applied Anthropology* (Prof. Barnett), 2) *Meaning across Cultures* (Prof. Boon), 3) *Ethnology of Mainland Southeast Asia* (Prof. Kirsch), 4) *Myth, Ritual, and Sign* (Prof. Siegel), 5) *Anthropology of Everyday Life* (Siegel), 6) *Myth and Mythology* (Siegel), 7) *Southeast Asia Readings* (Barnett, Boon, Kirsch and Siegel)

* Kenji Tsuchiya, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Government: 1) *Southeast Asia Undergraduate Seminar* (Prof. Kahin), 2) *Government and Politics of Southeast Asia* (Prof. Anderson), 3) *The United States and Asia* (Kahin), 4) *Political Anthropology: Indonesia* (Anderson and Siegel), 5) *Southeast Asia Seminar: Vietnam* (Kahin and Visiting Prof. David Marr), 6) *International Relations of Asia* (Kahin)

このほかに、毎夏2カ月、インドネシア語の現地研修がサラティガ(中ジャワ)で開かれている。なお、Giok Po Oey氏を資料館長として、東南アジア各国の史料文献が大量に蒐集されて Olin Library におさめられている。これらは、日本および中国関係資料とともに Wason Collection の名で総称されていたが、数年前より、そのうち、東南アジア関係文献については、その蒐集に多大の貢献をした Echols 教授の名をとって、Echols Collection と称されるようになった。

さて、このプログラムにおいて、1982年秋現在 visiting fellow の資格をえて研究を続けている国外の研究者は全部で10名(うち3名は日本人)、また、上記のコースに参加して東南アジアを副専攻している学生(学部、大学院を含む)は56名、その専攻を地域別にみると、インドネシア23名、タイ8名、ヴェトナム5名、フィリピン5名、カンボジア4名、マレーシア3名、ビルマ1名(そのほかは、東南アジア一般ないし複数国にわたるもの)で、約4割がインドネシアを対象としていることがわかる。

次に Cornell Modern Indonesia Project について。先にも記した通り、これには、West Avenue 102番地の木立に囲まれた木造の館が充てられており、入口には、“Bhinneka Tunggal Ika”(「多様なものの統一」というインドネシア共和国の標語)が掲げられている。Ruth T. McVey がその著書 *The Rise of Indonesian Communism* (1965年)の扉に“To 102 West Avenue, Bhinneka Tunggal Ika”という献辞を記したことからもうかがえる通り、この「館」は、東南アジア(とくにインドネシア)をテーマに Ph. D. 論文を書く人たちの場所として機能してきた。

現在、1階の半ばが集会室および資料室、3階の一室が資料室に充てられているほかは、すべて研究室として使われており、朝から夜遅くまで、間断なくタイプを叩く音が鳴り響いている。数年前センタ

ーの同僚であった Dr. Thak Chaloehtiarana もここで論文を書いたひとりであるが、そのころには、真夜中の2時、3時まで仕事をする者が多く、まるで「戦場」のようであった、と話していた(なお、Thak さんは現在コーネルに滞在中)。

このプロジェクトの扱う仕事は、現在、雑誌 *Indonesia* (年2回刊行。1966年以来、すでに33号を刊行)の刊行と、モノグラフないし翻訳シリーズの刊行(現在までに61点を刊行)が主であり、Anderson 教授および Dr. Audley Kahin がこれに携わっている。

私自身もこの一室でタイプと向かい合う生活が2カ月近く続いているが、Thak さんのいう通り、いまでもここは「戦場」で、昼夜、休日関係なしに、その大半が仕事をしている、という状態である。そのほとんどが論文をかかえているから当然であるともいえるが、おのおの目の色を変えて仕事に没頭している雰囲気は、想像以上である。

現在ここに研究室をおいているのは、私および上記の Anderson (彼は Government とここに二つのオフィスをもつが、もっぱらここを仕事の間としている)および A. Kahin のほか、Sidney Jones, Dolina Millar, Esta Ungar, Laura Summers, Jim Coyle, Steve Helder, Farchan Bulkin, Anan Ganjanapan, Sachchidanand Sahai, 白石隆氏である。このうち、Sidney は、東ジャワのプサントレン(ナフダトゥル・ウラマ)の研究、Farchan はスハルト新体制の研究、白石隆氏はイスラム・ラディカリズムの研究で、ともにインドネシアを専攻している。また、Esta Ungar (歴史学)は16世紀ヴェトナム政治史研究、Dolina Millar (政治学)はタイの地方政治研究、Laura Summers (政治学)はシアヌーク体制とカンボジア・ナショナリズム研究、Steve (政治学)はヘン・サムリンとカンボジア左翼の研究、Anan (人類学)はチェンマイ地方の農村研究、Sahai (歴史学)はラーマ・ヤナの東南アジア version の研究を続けている。なお、私自身はインドネシア政治思想論をインドネシア語でまとめることをめざしてタイプを叩く生活を続けているが、Anderson (インドネシア政治史の執筆を計画中)や Siegel (中ジャワの文化論を執筆中)の関心と重なる部分が多いことで、まことに良い討論の機会を与えられている。(京都大学東南アジア研究センター助教授)